

のであるが、種々の事情から改革案が実施されるに至っておらず、そのために自習室本来の機能を十分に果しえないのは遺憾である。機械化した自習室が一応完成したことで、直ちに外国語教育が能率化し、成果が倍増することを期待することはできない。学生の自由選択によるクラス編成は、従来の固定クラス解消を前提とするが、これは学生側の反対で暗礁にのりあげたままであるし、授業時間の問題、時間帯の問題、ひいては学生の過密時間割の問題など一般教育のカリキュラム全体、および一部は専門教育にまでわたる種々の問題が依然として未解決のままである。これらの難問題をつぎつぎと解決し、すでに打ち出している改革案を実現するためには、当の外国語教師が意欲をもって、しかも相当な犠牲を覚悟のうえで事にあたらなければならないことは言うまでもないが、学生諸君はもとより、学内の他の教官のご理解とご協力をえなければならぬ。

ともかくにも自習室は今年度後期から開業した。が、何しろ学年度の半ばでもあ

り、予算的な措置もおくれたために、まだ十分な教材も整わず、時間帯の関係で利用時間の調整も思うにまかせない有様で、開業早々フル運転というわけにも行っていない。本来は自習のための装置であるが、目下のところは、主として一斉授業にあてており、同一時間帯に利用の希望が重複したりして、既設のLL教室を併用することで急場を凌いでいる。学生の過密時間割が多少とも解消し、改革案がある程度実現して、学生の間に音声面の自習を必要とする気運が高まってくるのでなければ、自習室の利用価値が真に発揮されるには至らないであろう。しかもなお、機械化した自習装置はあくまでも外国語教育の補助手段であることに変わりはない。そして、補助手段を有効に利用してこそ、理想的な外国語の教育と学習が達成されるというものである。

なお、外国語自習室の計画から設置に至るいろいろな段階で、物理学の小林先生、心理学の吉森先生、芸術学の池川先生に、それぞれご協力をいただいたことをここに記して厚くお礼を申しあげたい。

「国際教育学会」に出席して

渡 辺 英 夫

このたび国際教育学協会より「第6回国際教育学会」に招待され、総会と「表現とコミュニケーションに関する科学」の分科会の討論に参加しました。今回はカーン大学教授ミヤラレ博士を組織委員長に、会議は残暑厳しいパリ大学Ⅹ（ドーフィン校）で9月3日から5日間にわたって開かれました。共通テーマ<基礎学問の教育学への

貢献>を軌に、会議は5つの講演とパネルディスカッション、そして12の分科会での分野別での研究発表と討論によって進められました。参加者は54ヶ国、800余人の多数で、地元フランス、それに前回会議開催地のフィンランドからの出席者が多いのが目だち、他にユーゴ、ポーランドなどの共産圏から多数の参加があり、日本からは私を

合わせて10人が参加しました。会議は英語、フランス語、ドイツ語が公用語で、討論および発表には英語とフランス語の2語が使われました。

まず初日の3日午前中には開会式と来賓の挨拶などがあり、午後からは後述の講演と質疑、パネルディスカッション、そして各分科会活動にわかれ、それぞれ共通テーマを基にして次のように行われました。

【1】講演

1. 「教育学への挑戦」 (9月4日)
ソルボンヌ大学教授 M. デブセ
2. 「社会学の教育学への貢献」
(9月4日)
スタタン・アイランド・コミュニティー大学学長 W. ビレンバーン
3. 「経済学の教育学への貢献」
(9月4日)
ベルリン大学教授 H. マイアー
4. 「生物学の教育学への貢献」
(9月5日)
パリ大学教授 V. ブロック
5. 「児童心理学の教育学への貢献」
(9月5日)
ロンドン大学教授 W. ウォール

【2】分科会

分科会は次の12にわかれ、各分科会毎に議長の選出、自己紹介、運営の方法などが決められた。今回の12の分科会の分類は組織委員会の下記の基準によるものである。(1)学校制度の一般条件と各地域の条件を対象とする学問。(2)教育関係と教育活動そのものを対象とする学問。(3)省察と発展を対象とする学問、そして、それらと関係学問との関連を共通テーマに基づいて組み合わせたものである。

1. 教育史

2. 比較教育(教育学と社会科学)
3. 数学と科学教育
4. 精神分析と教育
5. 表現とコミュニケーションに関する科学(言語学、美学、記号学とそれらの精神病理学的分野)
6. 技術教育
7. 教育心理学(カリキュラム、教授法など)
8. 教育学と教員養成
9. 教育学に於る研究の方法
10. 教育哲学
11. 生涯教育
12. 社会心理学とその教育学への接近

【3】パネルディスカッション(9月4日)

「教育システムに於る探求と変化」

- 発表者 H. デュゼイド氏(ユネスコ本部)
M. コザキヴォッチ教授(ポーランド科学アカデミー)
M. コスクニイミイ教授(ヘルシンキ大学)
B. ホルメス教授(ロンドン大学)

* * *

私の参加した分科会「表現とコミュニケーションに関する科学」では参加者は常時40人余、研究者の国籍は19であった。9月3日午後の第1回分科会で組織委員Ch.ブリッド氏の司会の下、まず次のように会議を運営することを決めた。

(1) 日程

- 9月4日:動物のコミュニケーションについて(民族学)
9月5日:文字と言葉による表現—コミュニケーションの能力と話し言葉の精神病理学—

9月6日：美学の心理学と表現の精神病理学

- (2) 形式：円^{ターブル・ロンド}形^{形式}式（発表と討論。会議用語：フランス語）
- (3) 議長に小林正氏（東大名誉教授）、レポーターにヴィットヴァー氏（ポルドー大教授）を選ぶ。

分科会での発表と討議のあらまきは次のようである。

9月3日：ヴィットヴァー氏より「言葉の心理学の教育学への貢献」という発表があり、氏の主張する<言葉の心理学>の教育学への深いかわりが詳しく述べられた。氏の意見は極めて独創的なもので、これに対し言語学と言語心理学の二面から多くの質問が浴せられた、特に(1)言葉の心理学(psychologie du langage)と言語心理学(psycholinguistique)の違い。(2)論理と言葉の心理学の問題(言語習得の問題)。(3)構造主義、行動主義、そして言語学との関係などの問題である。結局、我々はこれらの問題を明らかにするには<表現とは何か>を再び根本に戻って問う必要にせまられたが、一応この問題を不問にして、この分科会の進行の過程で各参加者の討論の中で考えてみることにした。

9月4日：「動物のコミュニケーションの研究」

ショーヴァン氏(フランス)から動物の性格研究を通しての動物と幼児の間の知的、情緒的な面に於る発達初段階の近似現象についての発表があった。特に情操の発達、人格形成に於る社会的影響の重要性が豊富な例によって示された。(民族学の教育学への貢献)

二つの確認事項

- (1) 実験者の実験に対する影響は教育者の教育に対するそれと同じである。
- (2) 基礎科学との関連に於て、教育を定義することが出来る。(新しい複雑な科学である民族学と比較される教育学の概念の多様性)

9月5日：「文字と言葉による表現」

- (1) メニャール夫人(フランス)は成人の英語教育に於る話し言葉の教育の難しさについて発表。抽象的な知識ではなく、実用的な知識を与える必要性と、話し言葉教育の目標が問題となった。彼女によれば、言葉が自分のものになるとは、それが肉体的かつ知的に楽しみとなることである。(「耳が自然に聞き、口が自然に喋る。」)
- (2) シャブロン博士(フランス)は話し言葉の理解と音感の関連について発表。言葉の習得は耳と聴力の精神病理学的問題に起因することを明らかにした。またこの点からLL教育について懐疑が表明されたことは注目された。

(3) マルセロ・モッタ・カルネイロ氏(ブラジル)は高等中学校(12才ー16才)での教年間にわたる母国語の話す能力向上に払った研究成果を発表。豊富な例をあげて、最もこの教育で重要であるのは生徒自身の<内気さ>の克服(自信を持つこと)であると述べ、その方法として生徒のよく知っている言葉を用い主題をかえて話させるという彼自身の方法とその実例をあげた。

(4) ルロワ氏(ベルギー)は子供の言語的な理想段階と、そこへ至る方法について興味ある実例を発表された。即ち、能力別によるグループ教育である。(マルリー・ル・ロワ高等学校の場合)この方法は外国語教育についても適用されうる。氏は表現そのものには国境はないのであるから、問題は言語の違いに応じてのコミュニケーションの構造をとらえることによって解決されることを示唆した。

9月6日:「美学の心理学と表現の精神病理学」

(1) アンベルティ氏(フランス)「子供の音感教育について」

発達の知的分野と同様、音楽的な能力についても<批判期>のあることを主張。それを認めた上での教育の方法とその実践。

(2) ヴォジケル夫人(ポーランド)は「人間の現実への執着とその超越」に於てイメージとその表現形式の重要性について発表。視覚教育の面で生徒の側の批判とその反応がイメージの創造を促すという<イメージ=人間>の相互関係を述べた。

当分科会に於ては上述のような表現とコミュニケーションの関係、特にコミュニケーションの内での表現と、自然現象あるいは個人的な感情を表わすものとしての二つの表現の方法を教育学との関係において発表、討論したのであった。さらに分科会会場で上映されたヴィアール博士の二つのフィルム<L'oeil-signé>と<Peintures folles, Peinture sage>と合せて、我々は表現とコミュニケーションの分野での基礎学問の教育学への深い関与と、その貢献にあらためて目を見張ったのである。そして我々は実践と共にある教育学のこの面での一層の発展を確信して有意義な5日間の日程を終えた。